# テイルズオブヴェスペリア【弱肉強食を掲げる一人の転生者】

ムラマサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
テイルズオブヴェスペリア【弱肉強食を掲げる一人の転生者】

【Ｎコード】
Ｎ０９１１Ｘ

【作者名】
ムラマサ

【あらすじ】
よくある転生もの、この物語は弱肉強食を掲げるオリ主が原作ブレイクする話です。

# 第一話　プロローグ

突然だが俺の名前は　志々雄真実　けして包帯まみれでも重度の火傷もおっていない。

そんな俺も今日からはれて高校二年生ただいま通学中だ。

通学中暇だし音楽を聞こうとしたその時大きなクラクションの音が聞こえた。

音がした方を見ると小学生と思える子供がトラックにひかれそうになっていた。

子供はパニックになっているのかその場から動こうとしなかった。

とにかく俺はその子供を助けようと飛び出した。

後少しでひかれそうになったその刹那、俺は子供を突き飛ばすことに成功した。

「（よかった）」

そう思ったのも一瞬で俺はすぐにトラックにひかれた。

体を襲う凄まじい衝撃を受け俺は何がどうなったかわからなくなった。

体の感覚がなく、意識が遠くなってきた。

ふと視線をずらすと俺が助けた子供は泣いてはいたが怪我は無いようだった。

それをみて俺は安心し意識を手放した。

・・・・　なんてことを頭の中で想像しながら俺は子供がトラックに跳ねられるのを黙って見ていた。

よくこんな感じで二次小説のオリ主は子供を助けて死んで神様の間違いでしたお詫びに転生ってパターンだが、俺はそんなことはしない。

理由を挙げれば三つある、一つめは単純に助ける義理がない。二つめは助けようとして間に合わず巻き込まれる可能性があったから。

三つめ多分これが一番の理由だと思う。

その理由は俺は目の前で人が死ぬのが見てみたかったからだ。

その願いは見事叶い子供はトラックに轢かれて全身血まみれで

手足が変な方向に曲がっておりもうグシャグシャだった。

まわりにいる通行人は悲鳴をあげたり携帯で救急車を呼んだり一部吐いている人もいた。

悲鳴に誘われ続々と野次馬が集まって来ており、俺は新学期早々遅刻は嫌なのでその場を離れることにした。

その瞬間俺のまわりが白く光り俺は意識を失った。

## 第二話

あの謎白い光に包まれたあと、俺はなにもない真っ白な空間にいた。

「あれ？なんだここ？。」

「気がついたか。」

声がしたほうを見てみると一人の幼女がいた。

「なんだお前ママはどこだ、早くしないと幼稚園に遅れちゃうぞ。」

「ふふっ私に親はいないし幼稚園にいく必要はない、なぜなら私は神だからな。」

「はっはっはっ悪いが神様ごっこに付き合っている場合じゃないんでね、他の！？っっぐあぁぁぁぁっ！！！。」

突如俺の体に電撃がはしった。

「ふふふ今のはちょっとした脅しだ、信じないなら次は精神的にギリギリまで追い詰めてやるが？。」　そういって幼女（自称神）は小悪魔のような笑みを浮かべた。

「へいへいとりあえず信じますよ。でその神様（幼女）がただの高校生である俺にいったいなんのようですか。」

「ふむ実はお前に転生してもらうためにここに召喚させてもら

った。」

「転生？それって二次小説でお馴染みの？。」

「ああそうだお前は私のテストに唯一合格したからな。」

「テスト？いつそんなのしたんだ、俺には身に覚えがないんだが？。」

「お前ここに来る前になにかなかったか。」

「ここに来る前？ガキが一人事故ったくらいだが。」

「実はあれが私の用意したテストだ。あの子供を見捨てることが出来れば合格することができたのだ！。」

「ちょい待て普通そこは子供を庇って死に神様のミスでお詫びに転生させてあげる。ってパターンじゃないのか？。」

「ふんっ！見ず知らずの子供を庇って死ぬバカがどこにいる？。大体私はそういう輩が大っっっ嫌いなのだ！！。お前の前に私のテストを受けさせた奴らがいたが全員子供を助けて死におった！、腹が立ってそいつら全員魂から消滅させてやったわ。」

「メチャクチャだな、少なくともそいつらは俺よりは善人だと思うぜ。いいのかよ神様がそんなんで。」

「お前・・・勘違いしているようだが私は邪神だぞ、そういう輩が嫌いで何が悪い。」

「あ～なるほど納得したわ。それで俺はどこの世界に転生するんだ？。」

「ふふなんだ意外と潔いのだな。まあいいお前の転生する世界は『テイルズオブヴェスペリア』だ！。」

「ヴェスペリアか・・・まあ何度もやったことあるしいいか。それで転生ってことは特典もくれるんだよな。」

「もちろん選ばせてやりたいところだがそろそろ時間なんでな・・・特典はあちらに着いてからのお楽しみだ。」

「マジか・・・・選ばせてくれないのかよ。」

「安心しろ充分チートと呼べるものだ安心して逝ってこい。」

「ちょっ字がちg。」

そういわれて俺はまた白い光に包まれた。

# 第三話

「・・・どうやら無事についたようだな。」

邪神に転生させられて気づいたら森の中だった。

「とりあえず特典の確認・・・・ってどうやって確認すればいいんだ?。

特典の確認方法がわからず悩んでいると、突如目の前に一つの袋が現れた。

「・・・これがあいつの特典か?。」

とりあえず中を見てみると一通の手紙と、金(ガルド)や携帯食料と水、それと一振の刀と黒光りする腕輪のような物が一つ、純銀製の指輪が五つ入っていた。

とりあえず手紙を読んでみると・・・。

「（これを読んでいるということは無事に転生したみたいだな。まず袋に入っているものは私からの餞別だ有り難く受け取っておけ。次に特典のことについてだが・・・・、説明するのが面倒だから餞別の腕輪の効果などと共に簡単に書いておく、ともかくお前の新しい人生を与えてやったんだ、私を楽しませてくれよ・・・・。）」

・・・・・うん・・・・あいつ絶対暇潰しで転生させやがったな。

まあいいともかく今は特典の確認が優先だ。

手紙の裏を見てみると特典の能力が簡単に書かれていた。

特典その１　『るろうに剣心』の技＆ＴＯＶ術技の全て。

特典その２　不老、及び身体能力の強化。
特典その３　武具・道具作成能力。

特典その４　『るろうに剣心』志々雄真実の容姿。

最後に袋に入っていた刀・腕輪・指輪について。

刀は『るろうに剣心』志々雄真実が使っていた刀、無限刃。切れ味、耐久性など強化が施されている。

腕輪は私特製の武醒魔導器（ボーディブラスティア）。術技の威力強化。術を無詠唱で発動可能。オーバーリミッツを無制限で使用可能。

指輪は身につけると身体能力強化、及び不老になることができ、外すあるいは物理的に破壊ことはできない。生涯の伴侶などに渡すとよい。

「わーい（棒読み）スゲーチート・・・って４番目の特典ってなに！？。」　俺はすぐに自分の顔を刀の刀身で確認した。

そこにいたのは、慣れ親しんだ俺の顔ではなく。悪人顔のイケメンがいた。

なにを隠そう大火傷する前の志々雄さんである・・・・・。

自分の服装をよく見てみると、転生した時は気づかなかったが、紫の着物で右肩辺りが開けている格好であった。どうりで肌寒いと思った。

とりあえず特典の効果調べてみた・・・・・・。

とりあえず俺は、実戦あるのみと近くの森に入り魔物と戦ってみることにした。　そして今、俺の回りには魔物の大群がいた。こうなったのはある理由がある・・・・。

俺は森の中である木の実を見つけた。子供の拳ほどの大きさで下部は丸く、上部は細く尖った、硬そうな橙色の木の実。

これは、燃やすと魔物を引き寄せる匂いを出し、オマケに興奮状態にさせる木の実で、俺はこれを片っ端から集め魔術で一気に燃やした。

俺はさらに上級魔術『サイクロン』を煙りに向かって試し撃ちしてみた。

これにより、煙りは辺り一面に舞い、なかなか広い森のほぼ全域まで、木の実の匂いが届いた。

・・・・その結果が今の状況である。

「調子に乗るとろくなことが無いな、まあ不死だから死ぬ心配はないんだが。」

回想に浸っていたが、魔物の方はそろそろ限界らしく、今にも飛び出そうとするほど殺気立っていた。

「待たせたな魔物の諸君。さあ楽しいショーのはじまりといこうじゃないか！、くれぐれも俺を退屈させないでくれよ・・・・。」

俺はそう言い終わるのと同時に、腰に挿してあった無限刃を抜き放った。

それを合図に魔物の大群は、一斉に俺に襲い掛かって来た。

「ハアァァァァァー！

まずはすれ違い様に数匹の魔狼を切り伏せた。そして瞬時に鞘に刀身を走らせた。それにより、無限刃の刃によりそぎとられた魔狼の油が摩擦熱で燃えはじめた。

「これぞ壱の秘剣『焔霊』！、そしてこれがっ！。」

俺は近くの魔狼の首を掴み、右の手甲に仕込んだ爆薬を『焔霊』で着火、爆発し魔狼の首の肉が弾け飛んだ。

「弐の秘剣『紅蓮腕』！！。」

これにより魔狼の首は半ばちぎれかけていた。俺は魔狼を捨て群れに向き直った。

魔物といっても所詮は獣と同じ、火が苦手であることに変わりない。

現に近くにいた魔物は少し距離をとっていた。

「びびってんじゃねえぞぉぉー！！。くらいなぁっ！ファイアボール！。

俺はこれを好機と、魔術を群れに向かって撃ちまくった。

「まだまだいくぜぇ！！、バーンストライク！イラプション！フレイムドラゴン！スパイラルフレア！クリムゾンフレア！！これもとっとけぇぇ！エクスプロードォォォ！！！。」

普通では考えられない速さで下級、上級関係なく、様々な火属性の魔術が魔物を襲う。

辺り一面火の海になり多くの魔物が逃げ惑い始めた。

そんな魔物を俺は次々と血祭りにあげていった。

刀身が血と油まみれになった頃に一匹の巨大な魔物が群れを率いてこちらに向かってくるのが見えた。

おそらく、この辺りの主であろう巨大な猪のような魔物は、自ら先頭に立ち、雄叫びを上げながら猛然と炎に突っ込んできた。主が突っ込んだことによりできた道を、配下の猪が突撃するようにわ

たってきた。

「ハーハッハッ！！おもしれーじゃねーか！、真っ向勝負といこうぜぇ！！！！。」

鍔元から切先に至る、無限刃の全発火能力を開放！！

・・・これは、ある狩人が見たと言われる一つの話である。

その狩人は仲間の数人と魔物を狩りに来ていたのだが、進行方向上に突如火事が発生し、魔物がこちらに向かって走ってきたのだった。それに巻き込まれた狩人は気を失ってしまった・・・・。

目が覚めると狩人が見たのはとんでもない光景であった。

それは刀を持った一人の男と、その青年に向かって突撃する、この辺りの主として恐れられていた魔猪の主と、その群れであった。

狩人は青年の死を予想した。

あの主は、一度討伐隊として送られた、帝国騎士団の三個小隊を壊滅させたことがあったのだ。それ程の強さをもっていたのである。

騎士団の三個小隊ですら勝てなかったのに、たった一人の人間が勝てるはずがない、そう思っていた。

しかし、その予想は大きく覆された。

男が、刀の刀身を鍔に走らせると、刀から巨大な火柱とも思える、炎が発生した。

その炎は凄まじいの一言であった。

術でも魔術でも見たことのない、それ程猛々しく巨大な炎であった。

「終の秘剣『火産霊神(カグヅチ)』。」

男はそう呟き、その炎を刀の刀身に纏い、魔猪の主に向けて振り下ろした。

魔猪の主は炎の勢いに負けぬよう大地が震える程の咆哮をあげ、炎に突っ込んだ。それに続くように配下の魔物も雄叫びをあげて次々と突っ込んだ。

しかし、主を始めるとした魔猪達はその獄炎に身を焼かれていくだけであった。

しばらくは魔猪達の叫びとも悲鳴とも聞こえる、魔猪達の鳴き声しか聞こえなかった。

終わった・・・・そう思ったその時、魔猪の主が獄炎から身を乗り出した。

全身焼け爛れておりながらも、雄叫びをあげながらに男に突撃していった。

しかし男は焦った様子もなく、ただただ自然体で立っていた。

そして狩人は、男と主が重なり合うように見えた。お互いに譲らず、しかし触れ合うことなく文字通りすり抜けたように。男はその場から動かず、しかし主は走り続けるた。そして主が首を傾げた。そのまま不自然に半回転するや、ずるりと前足の間に落ちる。

自らの首を蹴飛ばしたその瞬間、落ちた首と首の断面から炎が舞い上がり全身を包み込んだ。

「フフフ・・・ハハハ・・・ハハハッ・・・ハァーーハッハッハッハッ!!!!」

男はその場で笑いつづけた。森にはしばらく男の笑い声と木々が燃える音しか聞こえなかった。

狩人の記憶はそこで途切れている。

あの男は一体何者であったのであろうか。

その問いに答えられる者は誰もいなかった。

## 第四話（前書き）

今回はかなり短めです

# 第四話

「さて・・・・・これからどうするか・・・」

さっきまでテンションアゲアゲだったが、今は冷静にこの後のことを考えていた。

単純に考えて候補は2つ。

騎士団かギルド、どちらかに所属するかだ。

金は充分にあるが、不老になった以上、金が無いと手に入れる手段がないと生きていけないしな・・・・。

一応、ギルドを立ち上げるという手段があるが、正直・・・面倒くさい。

さて・・・・・どうしたものか・・・・・

話しは飛んで、今は俺は〈帝都　テルカ・リュミレース〉にいる。

別に騎士団に入るというわけではないが・・・あの後、森を出てみるとこの帝都が見えたのでとりあえず、来てみたというわけだ。

とりあえず情報を集めるため、酒場に来てみた。

やっぱ情報収集といえばこういうところだよな。

適当に入ってみると、まだ昼だというのにそれなりに賑わっていた。

俺はマスターと思える男性に話し掛けてみることにした。

「オッサンちょっといいか？」

「んっ？なんだ若いの、ここらじゃ見ない顔だな」

「まあここに来たのは今日が初めてだからな。それよりも・・・最近なんかでかい事件みたいなのってなかったか？」

「？・・・いや特にないが・・・おめぇ新聞とか読んでねぇのか。駄目じゃねぇか情報ってのは大事なもんだぞ・・・ほれ、その新聞やるから読んどけ」

「おっ悪いな」　「気にすんな何日か前のだしな」

親切なマスターだったらしく、貰った新聞を読んでみると少なくとも、原作より前・・・いや〈人魔戦争〉より前だということがわかった。

その理由は新聞に〈フェリハイド〉という都市のことが載っていたからだ。

〈フェリハイド〉は〈人魔戦争〉によって失われる都市で、レイヴン・・・いやおっさんの故郷でもあるところだ。

その都市がまだある上に、騎士団の団長がアレクセイであることを踏まえると、少なくとも原作より十数年以上、前だということがわかった。

「・・・きまりだな・・・」

俺はそう呟き、マスターに礼を言ったあと、すぐに騎士団の門を叩くことにした。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0911x/

---

テイルズオブヴェスペリア【弱肉強食を掲げる一人の転生者】

2011年12月15日01時50分発行